



ヘティスと蓮也は冥界へ行く途中、エロスとタナトスという子供の姿をした天使、キューピットと出会う。そして、冥界へと通じる 100 万の通路の中から正解の通路を見つけ出した。そこを抜けると、霧がかかった薄暗い世界が広がっていた。そして、二人の眼前には何名かの人たちの靈魂が歩いている。ヘティスたちも、そこを歩いていくこととした。

蓮也

「ここは少し下り坂になっているようだ」

ヘティス

「そうね、それにしても、なんか不気味なオーラが強くなってくる・・・」

エロス

「ここは黄泉比良坂～♪」

タナトス

「もうすぐ冥界だ～♪」

その時、遠くから叫び声が聞こえた。

霧ではっきりとは見えないが、巨大な影が歩いて行く人を連れ去って行くようだ。

ヘティス

「今、叫び声が聞こえたけど・・・」

エロス

「あれは鬼だよ～」

タナトス

「煩惱が強いと鬼に拐われるからな～」

蓮也

「俺が先頭に行く。ヘティスは俺の後をついて来い。何かあれば俺がぶった斬る」

ヘティス

「わかったわ」

(蓮也ってこういう時に頼りになるんだけど、ぶった斬るとか、いつも解決方法がちょっと物騒なのよね・・・w)

蓮也が先頭に立ち、ヘティスがその後をついて行く。

ヘティス

(蓮也って容姿は中性っぽいけど、肩幅をこうやって見るとやっぱ男性ねw)

すると一体の鬼が襲いかかってくる。

蓮也が剣を抜き、水平に一閃すると、一瞬で鬼は真っ二つになり倒れた。

エロス

「こんな強い人間、久しぶりに見たよw」

タナトス

「こりゃ、ヤバイ強さだなw」

エロス



「普通は、戦士たちが大勢でかかって、やっとの思いでここを突破していくんだよ」

タナトス

「もちろん、それでも突破できないヤツだって大勢いるんだぜ」

エロス

「さっきのミリオンゲートでは運が試されるんだけど、ここでは煩悩や協力することが試されるんだ。けど、一人で倒しちゃうなんてインチキだよ！」

エロス

「一人で倒すなんてチートすぎるよw」

タナトス

「こりゃ、トンデモないヤツが来てしまなったなw」

蓮也

「俺にとってはこれが普通だ」

ヘティス

(プロテクションを張ろうとしたけど、おわっちゃったわ・・・)

蓮也は再び歩き出す。

ヘティスは蓮也の背中を見て、頼もしくもあり、様々な感情がよぎった。最初に助けられた時のこと、宿舎で抱きしめられた夜のこと、七輪山の雪山で身を挺して蓮也を必死で助けた事も思い出すと、改めてヘティスの胸の鼓動は高まった。

ヘティス

(あの時は必死だったけど、あんなことしちゃって、蓮也はどう思っているのかな・・・)

(私にとっては・・・、だけど、蓮也にとってはどうでもいいことなのかな・・・)

そこへ、エロスが小さな声でヘティスに語りかける。

エロス

「ねえ、ねえ、緑の瞳のお姉ちゃん♪」

ヘティス

「なあに？」

エロス

「お姉ちゃんは、あの銀髪のお兄ちゃんの事が好きなんでしょ？w」

ヘティス

「な・・・、何よ、いきなり！」

エロス

「ボクはそういう特殊能力を持っているんだw」

ヘティス

「子供はそういうことに首突っ込まないの！」

エロス

「子供じゃないよ。ボクは100万歳だって言っただろ？」

タナトス

「100万と500歳なw」

エロス

「そう、100万500歳♪」



ヘティス

「どーみてもアナタたちは子供なんだけど～」

エロス

「ボクの名前は別名、“クピトー”って言うんだけど、人々は“恋のキューピット”って言うんだ。少しは聞いたことあるだろ～？」

ヘティス

「ふーん。で？」

（神話に出てくる子供の天使よね……。そう言えば、この子たちもそうだけど、神話に出てくる名前がやたらに多いわね……）

エロス

「誰かが誰かを好きになる場合、ボくらキューピットがお手伝いをしているのさ。もちろん、生きている人たちには見えないけどねw」

ヘティス

（見えないって、このコたち、ポコーみたいな妖怪？妖精？なのかな？）

エロス

「ここに愛のエネルギーを込めた“恋の矢”があるんだ。これをお姉ちゃんに渡すから、これをあのお兄ちゃんのハート目掛けて投げるんだ。そうするとお兄ちゃんは、お姉ちゃんのことを好きになっちゃうんだよ～！すごいでしょ～♪」

ヘティスはエロスから「恋の矢」を受け取った。

「恋の矢」の矢尻はハートの形をしており、黄金に輝いていた。そして、不思議なオーラを放っていた。ヘティスはそれを感じると、エロスの言っているような力が、この矢にはあるのかもしれない、と思った。

ヘティス

（今から会いに行くかもしれないエウリディーチェさんと蓮也が出会ったら、彼はどういう気持ちになり、どういう選択をするのかしら……）

（もし、この矢が、そう言う効果があったとして、この矢を使って彼が私に振り向いてくれたら、確実に未来は変わる。私とより密に連携できるようになるだろうし、それに私のことを……）

“恋の矢”を使うメリットは二つあった。蓮也との連携を深めることができることと、彼をエウリディーチェから遠ざけ自分に振り向かせることができることである。しかし、この場合、自分に振り向かせたいという思いが強く、連携を強めることは、理由の後付けであったかもしれない。

ヘティスは決意した。

エロス

（ワクワク♪）

タナトス

（ドキドキ♪）

ヘティスは持っている“恋の矢”をしばらく見つめ、遠くへと思いきり投げた。そして、矢は蓮也とは全く違う方向に飛んで行った。



エロス

「あ～！そんな～！ママからもらった矢が～！」

ヘティス

（ママ・・・。なんか、この子、マザコン臭いわね・・・）

「こんなの、私にはいらぬわ！こんなので振り向かせても、それは相手の本心ではないでしょ？人の心をコントロールすることって、とても虚しいことよ」

エロス

「そんなことないよ～。拾って来て、もう一回、恋の矢を投げて素敵な二人の愛を獲得しようよ～」

ヘティス

「ボク、ダメよ。こんなオモチャで人の心を惑わせちゃw」

エロス

「おもちゃじゃないよ～！この矢にはママの愛のエネルギー“リビドー”がたっぷり入っているのさ～。ボクのママは愛と美の女神アフロディーテって言ってスゴいんだぜ～！」

ヘティス

「なによ、そのリビドーって」

「それに、そんなのって愛じゃないわ！それが愛なら、そんな愛、私にはいらぬ！」

「愛ってのは、お互いの気持ちが“合う”から“愛（あい）”って言うのよ！」

と、ヘティスはきっぱりと言った。

タナトス

「よっしゃ～！エロスの失敗な～！今回の賭けは俺の勝ち～！後で俺に奢れよな～、エロスw」

エロス

「くっそー！今まで殆ど勝って来たのに～！ひっさしぶりに失敗した～！」

ヘティス

「どういうことお？もしかして、今、私がこの矢を使うか使わないかで賭け事をしたのお？」

タナトス

「あ・・・、嬉しくなっちゃまって、つい声が出てしまったw」

ヘティス

「コラ～！キミたち～、人の心を弄んで、そんなことしていいと思ってるの～！」

エロス

「ヤバイ、このお姉ちゃん、怒ってるよ！」

ヘティス

「悪い子はお尻ペンペンするわよ！」

タナトス

「うわ～、この姉ちゃん、怖いぞ～！」

エロス

「よし、こうなったら、逃げるしかねーな！」

すると、そこへ美しい妖精のような少女が現れた。



清楚な服装に、背中には蝶の羽が生えている。

エロス

「あ！プシュケー！」

「か・・・、隠れなきゃ！」

エロスは近くの岩の影に身を隠した。

プシュケー

「あら？今、私の愛おしいエロス様のオーラと御声が聞こえたような。気のせいかしら？」

「けど、今は先を急がないと」

そう言って、プシュケーという少女は通り過ぎて行った。

ヘティス

「どうしたの？急に隠れちゃったりして」

エロス

「・・・キミには関係ないことだよ」

タナトス

「なんかつまんねーな。もう行こうぜ、エロス」

エロス

「そうだな、タナトス」

と言って二人のキューピットは何処へともなく飛び去って行った。

蓮也

「何をしている、先を急ぐぞ」

ヘティス

「あ、うん」

再び、ヘティスは蓮也の後ろをついて行く。

ヘティスは蓮也の背中を見ながら、愛とは何だろう、と改めて思うのであった。